

ににんさんばそう
二人三番叟

それ^{とよあきつす}豊秋津洲の大日本、^{くにとこたち みこと}国常立の尊より、^{あまつかみななよ}天津神七代の後、^{ちじん}地神の始め^{あまてらす}天照

^{おおんがみ}
大神。

「おおさへ / \、ほふ悦びありや、悦びありやわがこの所よりも、ほかへはや
らじとぞ思ふ」

物の音につれて立ち舞ふ^{おみごろも}小忌衣、^{せんざい}千歳は近江なる白髭の御神なり。^{じょう}黒き尉は住

吉の大神、^{おんがみ}鼓は浪の^{たかま}どうど打つ音は高天が原なれや、岩戸に向ふ神かぐら、

ほそろぐせりと吹く笛もひいやひしぎの音色まで春は霞の立姿。

「そなたこそ。」

初日は諸願満足円満、二日の日はまた二つ柱、^{うづめ みこ}宇津女の神子が

一^ひト二^ふタ三^み四^よ五^いツ六^むユ七^な八^な九^やの十^こ、百^も千^ち万^{よろ}の舞の袖

五月のさ女房が笠の^は端をつらねて、早苗追つ取り打ち上げて諷ふた。

^{せんちょう}
「千町」

「万町」

「億万町」

田をばぞんぶりぞ、田をばぞんぶりぞ、ぞんぶり / \ ぞんぶりぞ。

御田を植えるならば、笠買うて着せうぞ。

笠買うてたもるならば、なほも田を植ゑうよ。

三日は福德寿福円満、^{ことくじん}子徳人の子宝、^{くるまざ}車座に並べた。

にっぽん文楽「二人三番叟」 床本

たつまつ、いるまつ、かいつく、ひつつく

火打袋ぶらりと付けて候ふぞ。

これ式三の故実にて三日^{さんじつ}、これを舞ふとかや。

柳は緑花は紅数々や

浜の真砂^{まさご}は尽きるとも、尽きせぬ和歌ぞ敷島の神の教への国津民^{くにつたみ}

治まる御代^{みよ}こそ目出たけれ。

※上演の際、演者により、詞章に多少の異同がありますことをご了承ください。